

分科会の名称 里山と生物・ビオトープ



委員名と役割分担

田中正彦（代表）

網代春男（副代表）

木幡英雄（記録係）

実行委員：横山武，鈴木俊輔，染谷迪夫，高木純一，三輪浩司，笹子全宏，高木晋，越川重治

当日スタッフ：橋本早苗，三輪妙子，前野優子，舘野光輝

タイムテーブル

10:50～12:00 第一部

分科会趣旨説明など 田中 正彦（分科会代表）

<事例発表>（各13分）

1. 10:50～11:03 「里山での植物観察を通じて」 細川 隆（茂原高校）
2. 11:03～11:16 「昆虫から見た里山の変化」 梶 真史（厚木市郷土資料館）
3. 11:16～11:29 「淡水魚類からみた谷津田の生物多様性」 田中 正彦（犢橋高校）
4. 11:29～11:42 「アカガエル類の卵塊モニタリング調査と谷津田保全」 長谷川 雅美（東邦大学）
5. 11:42～11:55 「鳥の目で見た里山の生物多様性」 越川 重治（都市鳥研究会）

12:00～13:00 昼 食

13:00～14:40 第二部

<パネルディスカッション>

コーディネーター：長谷川 雅美

パネラー：第一部の発表者 + 竹重貴志（県自然保護課）熊谷宏尚（県環境政策課）

出席者数 55名

基調講演等の内容

．事例発表

1．細川（植物）：里山にはいろいろな環境が見られる。作物なども重要な要素である。里山観察会を通して、多様な環境を見る目を養うことができる。里山は安全で、小さい子どもでも多様な空間に飽きることがない。下草刈りをする事で、アズマネザサの侵入を防ぐことができる。

2．槐（昆虫）：昆虫については、里山だけが特に多いというわけではない。10年間にわたる二次林縁での蝶の調査から、管理するとクロヒカゲが増えるが、ヒカゲチョウなど減少するものもあった。管理の仕方は農家に学ぶと良い。

3．魚類（田中）：佐倉市での魚類調査では、確認できた21種のうちホトケドジョウ、スナヤツメ、メダカなどの貴重種は、大きな河川より谷津田を流れる小さな土水路に生息していることが分かった。人が水路の泥上げなどの管理をすることで、こうした貴重種を含む多様な生物の生息環境が維持されている。田んぼと水路に段差がないことも多様性を維持する上で重要である。

4．両生類（長谷川）：圃場整備により、ニホンアカガエルが激減した。しかし、谷津田を復田することで、見事にニホンアカガエルが復活した。権現森では、水田1haあたり427kgのカエルが見られた。

5．鳥類（越川）：里山には2つの多様性（空間的多様性、時間的多様性）がある。笹刈りなどの林床管理をすることで、フクロウやエナガ、シジュウカラ、エナガなどの鳥類が増えるが、ウグイスは減少する。近年ウグイスやホトトギスの増加は、笹を刈らなくなったからではないか。火入れをしないでヨシ原を放置すると、2～3年でオオヨシキリが減少してくる。徹底的な管理は良くなく、いろいろな環境をモザイク状に残しておくことが大切である。

．パネルディスカッション

事例発表に対する会場からの質問，参加者の体験事例・提言，パネラーのまとめの順で進行した。

<会場からの質問>

刈り取った方がよいヨシができるのはなぜか。なぜ乾田が増えるのか。白鳥の餌付けに対してどう考えるか。タコノアシはどんな所に生えるのか。乾田化によって人間への影響はあるのか。生物がいた方が良いのだが、農業との関わりをどうする。など

<参加者の体験>

アズマネザサの増殖により、コジュケイが減った。アズマネザサをどう扱っていけばよいか。笹が増えたおかげで、ウグイスが増えた。昔は生活の中で笹を利用していた。イノシシ（イノブタ）が増えて困っている。水路に穴を掘ったりして鰐蓋につながることも考えられる。など

<パネラーまとめ>

細川：「里山保全」が教科書に掲載されるようになり、子ども達にも状況を伝えていきたい。活動に対しても好意的に見てくれることが多く、励みになる。

槐：虫は50%を占める。里山の虫は手に取ることができ生き物の躍動が感じられる。里山の親善大使。ぜひ虫にも目を向けて欲しい。

田中：伝統的な農業を受け継ぐことが生物多様性にも良いのではないかと。市民と一緒にどうやって田んぼや山を利用していけばよいかを考えていきたい。

越川：アカガエルが減ってきている。オタマジャクシを初めて見るという人が増えている。これからどうなるのか。里山を守る＝我々の原点・文化を守りということでも大事なことだ。

長谷川：里山保全についてもっとプロっぽく考えていきたい。

竹重（県自然保護課）：昔はたくさんいた生物が見られない。今までは、開発しないで（手をつけずに）環境保全することをしてきた。里山＝ビオトープという観点から行政的にも個人的にも考えていきたい。

熊谷（県環境政策課）：千葉環境再生基金、里山条例を利用した保全が可能であろう。里山も含め、農業、林業を保全していくことは難しいが、これから考えていくことは多い

分科会の提言

結論を出すことは目的としなかった。しかし「伝統的な農林業の方法を受け継ぐことが、人間を含めた生物多様性を維持していくことに欠かせない」ということであろう。